「　PHN　（思想・人間・自然）　」　　第４９号

（２０２１年１１月号）　　（Web版）

【　安藤昌益研究の最前線　・・・　２０２１　】

・安藤昌益の稿本『自然真営道』が狩野亨吉の手に渡る前に、一時 所蔵していた「天正堂内田氏」の蔵書印のある書物の紹介、およびそれらの書物の内容的傾向（読書傾向）からみえる「天正堂内田氏」という人物についての考察

——矢内信悟論文へのいくつかの「新発見」の書物の補遺と「天正堂内田氏」という人物についての推論

——「天正堂内田氏」は、「芦田氏」〔「依田氏」〕の一族と密接な関係がある人である。

——「天正堂内田氏」は、梅辻規清の「烏伝神道」の関係者である。

——その他「天正堂」という名に関連すると思われる書物・人物・出版社などについて

和田 耕作

・〔目次〕・

・〈1〉・はじめに
・〈2〉・安藤昌益の稿本『自然真営道』〔東京大学総合図書館蔵本〕にある「天正堂内田氏」の蔵書印について
・〈3〉・明治大学図書館『蘆田文庫』の中で「天正堂内田氏蔵書印」のある資料〔▼〕について
・〈4〉・京都大学文学研究科図書館「内田〔銀蔵〕文庫」の蔵書にある「蔵書印」について
・〈5〉・早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書〔▼〕について
・〈6〉・宮内庁書陵部の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書〔▼〕について
・〈7〉・愛媛大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書〔▼〕について
・〈8〉・九州大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」について
・〈9〉・国立国会図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」について
・〈10〉・東京大学大学院人文科学研究科・文学部図書室〔旧神道研究室旧蔵書〕の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」について
・〈11〉・早稲田大学図書館の「天正堂蔵書」印がある蔵書「■」について
・〈12〉・明治大学図書館「蘆田文庫」の「天正堂蔵書」の印がある蔵書〔■〕について
・〈13〉・明治大学図書館「蘆田文庫」の「内田蔵書」の印がある蔵書〔◎〕について
・〈14〉・早稲田大学図書館で「内田氏蔵本」印・「内田慎吾之印」がある蔵書〔▽〕について
・〈15〉・明治・大正・昭和期の「天正堂」という出版社などについて
・〈16〉・むすび

・〈1〉・　はじめに

・このたび〔2021年7月〕、「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会」の矢内信悟氏がこれまでに執筆した論考を、以下の2冊の本としてまとめて同時に刊行した〔「私家版」〕。

・〔Ⅰ〕「　安藤昌益から橋本玄益、師岡一族・幸徳秋水へ
　　――江戸から明治期の思想史の再検証を問う――　」

・〔Ⅱ〕「　安藤昌益から佐藤元萇・森鷗外へ
　　――千住に生き・継ぐ知の連鎖――　」

・私は、〔Ⅰ〕の中の「附録」の最初の論考
「　渡辺大涛は、真実を語っているのか？
　――続々と出てくる天正堂内田氏蔵書印、現時点での天正堂
　＝〔内田〕銀蔵説には根拠がない――　」
を興味深く読んだ。

・しかし、蔵書印などの「写真」類が、まったく収載されていなのが少しく残念に思った。そこで、それらのいくつかの書物などがネット上に紹介されていることがわかったので、その中のいくつかをここにまとめて収載し、安藤昌益の関連研究のための参考に供することにした。

・それらの「写真」類をたやすく掲載できるのがネットの利点である。しかし、著作権法に違反しない範囲での「引用」となるように、画像はなるべく「印章の部分のみ」の局部的なものとし、それぞれに出典を明記した。

・特に、早稲田大学図書館には、「内田銀蔵旧蔵」の書物が多く所蔵されており、かつ「天正堂内田氏」の旧蔵書も最も多い。その中でネット上に公開されているものを中心に紹介したい。

・さらに調査を進めると、矢内氏が紹介していない書物もいくつか見つけることができたので、これについても紹介する。

・そして、「天正堂内田氏」の旧蔵書の内容的傾向（読書傾向）を見ていくうちに、ある特色のあることがわかった。それは、「天正堂内田氏」という人物が何者であるか、という考察につながるものである〔後述する【考察】の項などを参照のこと〕。

・矢内氏も述べているように、「天正堂内田氏」と「内田銀蔵」との同一性には根拠がなく、別人と考えられる。

・さらに、明治・大正・昭和期に「天正堂」などを名乗っていた出版社などについても考察したい。

・・・

・【写真A】の上部から ①～④

〔稿本『自然真営道』　（東京大学総合図書館蔵本）　「大序巻」の巻頭部分より〕

〔矢内氏は実物を確認済。以下、寸法などは矢内信悟氏の記述による。〕

・［印番号］・①・「門外不出天正堂珍蔵」

・（タテ37mm×ヨコ37mm）〔以下の表記は、これに準ずる。〕

・［印番号］・②・「極秘」・（20mm×20 mm）

・［印番号］・③・「内田文庫」・（56mm×23 mm）〔変形型〕

・［印番号］・④・「天正堂内田氏蔵書印」（37mm×37 mm）

・〔以下に記述する太丸数字「①・②」などは、「印章」の番号である。〕

・〈3〉・ 明治大学図書館『蘆田文庫』の中で「天正堂内田氏蔵書印」のある資料〔▼〕について

・矢内氏は、明治大学図書館『蘆田〔伊人〕文庫』から、「天正堂内田氏蔵書印」のある以下の3点の資料を見つけている。

・▼・（1）・上総国與地全図・・・「⑤・④」

・▼・（2）・上総国與地全図・・・「⑤・④」

・▼・（3）・意宇郡松江白潟之図・・・「⑤・④」

・［印番号］・⑤・「内田文庫」・（43mm×42 mm）

・〔③とは異なるもの。〕

・［印番号］・④・「天正堂内田氏蔵書印」（37mm×37 mm）

・【写真B】・・・・⑤・

〔内田文庫〕

・〔蘆田文庫編纂委員会編『蘆田文庫目録　古地図編』、

2004年3月、明治大学人文科学研究所発行、より〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈4〉・ 京都大学文学研究科図書館「内田〔銀蔵〕文庫」の蔵書にある「蔵書印」について

・［印番号］・⑥・「内田氏所蔵図書之印〔記〕」（30mm×30 mm）

・［印番号］・⑦・「内田」（13mm×9 mm）・・・〔認印〕

・〔「⑥」は、矢内氏の記述では「印」とあるが、「記」が正しい。〕

・これは、内田銀蔵の没後に、早稲田大学図書館に遺族・内田糸子から寄贈された図書にあるものと同様のものである。

・内田銀蔵の蔵書の多くは早稲田大学図書館に寄贈されているため、京都大学文学研究科図書館の「内田〔銀蔵〕文庫」には、それほど多くあることはないと思われる。

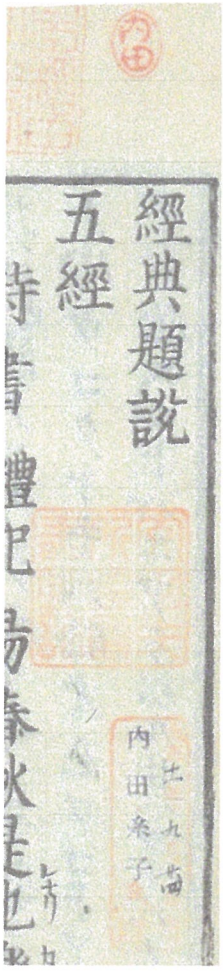
・矢内氏のいうように、「天正堂内田氏蔵書印」と「内田氏所蔵図書之記」（内田銀蔵旧蔵書）との印は別物であり、接点は確認できない。すなわち、「天正堂内田氏」は、「内田銀蔵」ではないと考えられる。

・ちなみに、早稲田大学図書館でネット上に公開されている中に、

・⑥・「内田氏所蔵図書之記」〔内田銀蔵の旧蔵書〕

の印が押されているものは、66点ほどある。

・【写真C－①】・・・・「⑥・⑦」



⑦・「内田」　〔認印〕

⑥・「内田氏所蔵図書之記」　（内田糸子印の上）

〔早稲田大学図書館「内田銀蔵」の旧蔵書から〕

・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈5〉・早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書〔▼〕について

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈5－A〉・矢内氏の確認済みのものは、以下の9点である。

〔早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」〕

・▼・（A－1）・武蔵国郡郷帖　二分冊・・・「⑧・⑤・④」

・［印番号］・⑧・「秘」（17mm×17 mm）

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある〔矢内氏の記述による〕。

・▼・（A－2）・武蔵国郡郷庄領志　上・下　二冊

・・・「⑧・⑤・④」

・▼・（A－3）・古暦便覧（吉田光由編）・・・「⑤・④」

・▼・（A－4）・周南先生文集　六冊　・・・「⑤・④」

・山県周南（1687～1752）著。名は「孝孺」、字は「次公」、号は「周南」。萩藩校「明倫館」学頭。荻生徂徠に師事。

・〔「松平蔵書」の丸印あり。「松平康国旧蔵書」〕

・「松平康国」については、【考察１】【考察６】を参照のこと。

・▼・（A－5）・易蘇象系普〔内題：日東周易蘇卦爻象系普〕

・・・「⑧・④・③」

・高松貝陵〔芳孫〕著〔自筆草稿、弘化4年〕

〔参考：弘化4年の刊本あり。〕

・▼・（A－6）・暦略註・・・「⑧・⑤・④」

・▼・（A－7）・石梁文集・・・「⑤・④」

・樺島石梁（1754～1827）。名は「公礼」、字は「世儀」、号は「石梁・万年」。久留米藩校「明善堂」教授。

・〔「松平蔵書」の丸印あり。「松平康国旧蔵書」〕

・「松平康国」については、【考察１】【考察６】を参照のこと。

・▼・（A－８）・鹿鳴吟社集・・・「④・③」

・▼・（A－９）・古印屏風・・・「⑤・④」

・**【考察１】**・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・**〈５－A〉**の9点の中に［印番号］・⑧・「秘」の印があるものが、4点みられる。これは「①」の「門外不出」や「②」の「極秘」よりは、軽いが「天正堂内田氏」にとっては、重要な書物であったのであろう。これには、何らかの理由があるものと思われる。

・「（A－５）・易蘇象系普〔内題：日東周易蘇卦爻象系普〕」は、易学者・高松貝陵（ばいりょう）（1782～1861）の著作である。

・名は「芳孫」、号は「貝陵」「易蘇堂」。

・「系普」は「系譜」に同じ。

・「（A－７）・石梁文集」は、「松平康国旧蔵書」は、このほかにも「村石文庫」「天正堂蔵書」の印のあるものが、同じく早稲田大学図書館から見つかっている〔【後出】〈11〉の（11－１）参照〕。

・【後出】〈11〉の（11－１）・熊耳先生文集．正編・・・「⑨」

・詩文家・大内熊耳の文集である。

・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・松平康国旧蔵（「松平蔵書」の印あり）

・松平康国は、漢学者。早稲田大学名誉教授。無窮会東洋文化研究所教頭。1863～1946。

・名は「康国」、字は「子寛」、号は「天行・破天荒斎」

・松平康国は、内田銀蔵と早稲田大学での同僚であった。

・「天正堂内田氏」と「村石文庫」「天正堂蔵書」の「天正堂」との関連については不明である。

・松平康国の旧蔵書ではないが、「村石文庫」「天正堂蔵書」の印のあるもう一つの書物については、後述の「**〈11〉**・早稲田大学図書館の「天正堂蔵書」印がある蔵書について」を参照されたい。

・ちなみに、早稲田大学図書館に「松平康国旧蔵書」は、161点ほどある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈5－B〉・和田耕作が確認したものは、以下の４点である。

〔早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」〕

・〔ネット上に公開されている現物資料による確認。〕

・▼・（B－１）・芦田記・・・・「⑧・⑤・④」

・『芦田記』(依田記)は、「依田康勝」後の「加藤宗月」（加藤康寛、1574～1653）の撰による。

・『芦田記』(依田記)は、「戦国武将の芦田氏三代」の記録である〔【考察３】を参照〕。

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある。ただし、後からの４丁分については、「柱刻」のない用紙が使用されている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【前出】の矢内氏確認の早大本「（A－１）・武蔵国郡郷帖」にも、同様の「柱刻」がある。

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

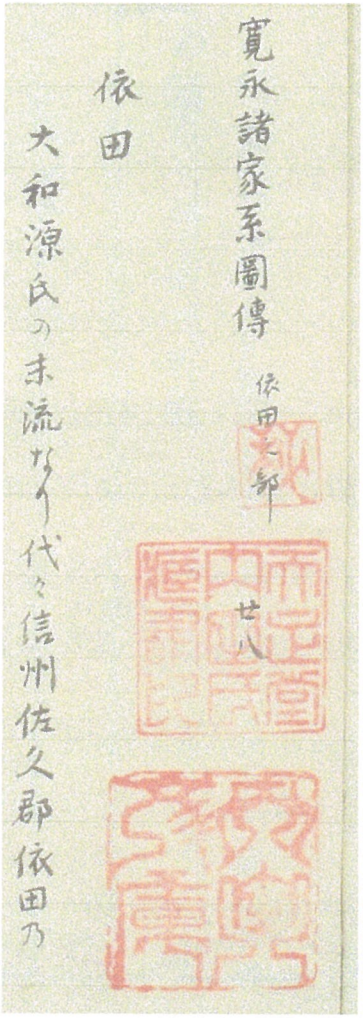
・【後出】の愛媛大学図書館蔵〈７〉（７－1）・蟻の念〔梅辻〔賀茂〕規清著〕・・・「⑧・⑤・④」にも同様の「柱刻」がある。

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・（B－２）・寛永諸家系図伝．28「依田之部」・・・「⑧・④・⑤」

・【写真D】・［印番号］・⑧・「秘」〔上から「⑧・④・⑤」〕



・〔早稲田大学図書館蔵 『寛永諸家系図伝．28「依田之部」』 より〕

・▼・（B－３）・甲信両国信玄衆誓詞・・・「⑧・⑤・④」

・▼・（B－４）・白虎通徳論．1-4巻・・・「④・③」

・「菊池晩香旧蔵書」。

・菊池晩香（1859～1923）、名は武貞、字は仲幹、通称は三九郎、号は玉渓・晩香。早稲田大学教授。

・**【考察２】**・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・ここに〔**〈５－B〉**〕新たに見つかった4点の中も、［印番号］「⑧・〔秘〕」のある書物が3点ある。それに、後述の愛媛大学図書館蔵〈７〉（７－1）・『蟻の念』を加えると4点になる。

・特に「（B－１）・芦田記」と〈７〉（７－1）『蟻の念』にある

「天正堂讀我書屋蔵」という「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕のある書物が2点確認されたことは重要である。

・すでに、矢内氏が確認している「（A－１）・武蔵国郡郷帖」を加えると3点になる。

・それは「天正堂内田氏」という人物が、並の人物ではないことを示している。あるテーマを持って書物を購入〔筆写〕しているものとみられるからである。

・そのテーマのひとつが【考察３】の「芦田氏」〔「依田氏」〕系図とその一族へのこだわりである**［テーマ＜１＞］**。

・【考察３】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・**［テーマ ＜１＞］**についての考察・

・▼・「天正堂内田氏」が、「芦田氏」〔「依田氏」〕系図とその一族の歴史にこだわるのがなぜか。
「天正堂内田氏」は、「芦田氏」の一族と密接な関係にある人物と思われる。　・▼・

・このたび、「（B－１）・芦田記」と「（B－２）・寛永諸家系図伝．28「依田之部」」の2冊の「本文」の「筆跡」を比較したところ、同一の人物による「筆写」であることが判明した。３つの印も「⑧・⑤・④」であり、同一である。

・この「（B－１）・芦田記」と「（B－２）・寛永諸家系図伝．28「依田之部」の2冊には、さらに内容的にも大きな共通点が確認された。すなわち、ともに「芦田氏」〔「依田氏」〕の系図にかかわる内容であることが判明した。また、「（B－３）・甲信両国信玄衆誓詞」も、「芦田氏」〔「依田氏」〕の関連文献である〔後述、参照〕。

・以下に、「芦田氏」〔「依田氏」〕に関連すると思われる「天正堂内田氏」の旧蔵書一覧を示す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」】

・1）▼・（A－1）・武蔵国郡郷帖　二分冊・・・「⑧**「秘」**・⑤・④」

・2）・▼・（A－2）・武蔵国郡郷庄領志　上・下　二冊

・・・「⑧**「秘」**・⑤・④」

・3）・▼・（B－1）・芦田記・・・・「⑧**「秘」**・⑤・④」

・4）・▼・（B－2）・寛永諸家系図伝．28「依田之部」

・・・「⑧**「秘」**・④・⑤」

・5）・▼・（B－3）・甲信両国信玄衆誓詞・・・「⑧**「秘」**・⑤・④」

・・・・

どである。しかし、「芦田氏」ゆかりの地は、今日の群馬県・山梨県・静岡県・福井県など広範囲に及んでいる。

・「松平修理太夫康国」もまた、小諸城主となる。

・「松平右衛門太夫康真（加藤宗月）」は、越前福井藩の城代家老となる。福井における芦田氏墳墓は「總光寺」にある。

・明治以降「松平康真」の子孫は、信州・芦田村へ帰村した。

・「芦田氏」の歴史の中に、直接「天正堂内田氏」に結びつくものはない。しかし、「天正堂内田氏」という人物が、「芦田氏」〔「依田氏」〕の一族であるという可能性も否定できないように思われる。

・《参考文献》・

・a）市村到著『戦国三代の記――真田昌幸と伍した芦田（依田）信蕃とその一族』（2016年9月、悠光堂刊）

・巻末に『廬田記（依田記）』（原文）を収録。

・b）市村到著『戦国三代と天下人――芦田（依田）氏の軌跡から』（2020年7月、悠光堂刊）

・・・

『蟻の念』が愛媛大学図書館にあることが判明したので、次項の〈7〉に示す。

・「天正堂内田氏」と烏伝神道との関係が、［テーマ＜2＞］である。

［テーマ＜2＞］については、・〈7〉・項と・〈9〉・項を参照。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈7〉・愛媛大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書〔▼〕について

・このたび愛媛大学図書館の「鈴鹿文庫」から「天正堂内田氏蔵書印」のある蔵書が和田耕作により１点〔「蟻の念」梅辻規清著〕が確認された。

・愛媛大学図書館の「書誌データ」による確認であるが、国文学研究資料館のデータベースには、蔵書印のあるページの画像が公開されているので、それからの画像を示す〔【写真E－①～③】〕。

・▼・（７－1）・蟻の念〔梅辻〔賀茂〕規清著〕・・・「⑧・⑤・④」

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

・これには、早稲田大学蔵書の前出〔〈５〉の（B－１）・芦田記〕と同様の印と「柱刻」がある。つまり、「（B－１）・芦田記」の筆記者〔もしくは筆記依頼者〕と「（７－1）・蟻の念」の筆記者〔もしくは筆記依頼者〕が同一人である可能性が高いということである。

・この『蟻の念』は、梅辻規清が当時の寺社奉行・松平伊賀守忠固〔後の老中、上田藩（藤井松平家）藩主〕に奉じた建白書である。したがって、直接「烏伝神道」に関する内容の書物ではない。

・主に印旛沼開鑿事業に、江戸の貧民たちを従事させれば、江戸の治安を改善できるなどと論じている。そして、江戸の風俗・治安の改善などを「分限者」（財産家）たちにさせてはどうかというものである。

・また、神道を中心とした国学の再興策（学校の設立など）についても述べているものである。

・瀧本誠一編纂『日本経済大典』第33巻（昭和4年、啓明社刊）には、梅辻規清の『斎庭の穂』『蟻の念』２著が収録されている。参考までに、この「解題」からその「略伝」の一部を引いておこう。

「梅辻飛騨守、名は規清、対翁と号す。三午翁等の別号あり。世々上賀茂の社人にして、文化十年従五位に進む。規清 平生 心を神道、国学、天文、暦数の学に用ひ、好んで諸国を遊歴して、万物の神秘を研究し、傍ら神道教法の事に従事し、又常に勤王開国の志を抱き、曾て神祇官再興、国学復興、海防策、沼池開発、河底浚、防火線、金融、貧民救助、無頼漢放逐、植物農業、米相場等の数目を挙げて、専ら経済に関する事を論究細記して十冊となし、之を時の執政に献策する所ありと云ふ。」〔『日本経済大典』第33巻、解題、pp18～19〕

・この「解題」では、特に梅辻規清の実学的側面が強調されているように思われる。

・さらに、梅辻規清の影響力についての記述をみてみよう。

「弘化年中、江戸に移つて、家を下谷池の端に定め、端鳥園〔瑞鳥園〕と号して、之を神道教法の本社とし、又別に中橋及京橋に二箇所の支社を置きて、講筵を開き、民庶を教導せり、幾もなくして、教法大に広り、門弟信徒、盛に集りて、其の数実に何千人を以て算し、百五十余名の諸侯を始め、其の他学者神官、諸士、剣客、力士、農商工、落語家、俳優等到らざる者なく、会堂日夜、鐸声絶えず、履屐常に戸外に溢る。此に於て遂に幕府の忌諱〔きき、国の禁令〕に触れて、獄中に投ぜられ、糾問数月の後、八丈島に配流せられる。規清配所に在て、益々其の志 固くし、島民を教育するの旁ら、教書一百巻を著はす。居ること十四年、年六十四にして、島中に歿せり。実に文久元年七月なりと云ふ。〔『日本経済大典』第33巻、解題、pp19～20〕

・「教書一百巻」とは、少しく強調しているものと思われるが、その

影響力の大きさには、目を見張るものがある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【前出】の矢内氏確認の早大本

・〈５〉の「（Ａ－１）・武蔵国郡郷帖」・・・「⑧・⑤・④」

にも、同様の印と「柱刻」がある。

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」

で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

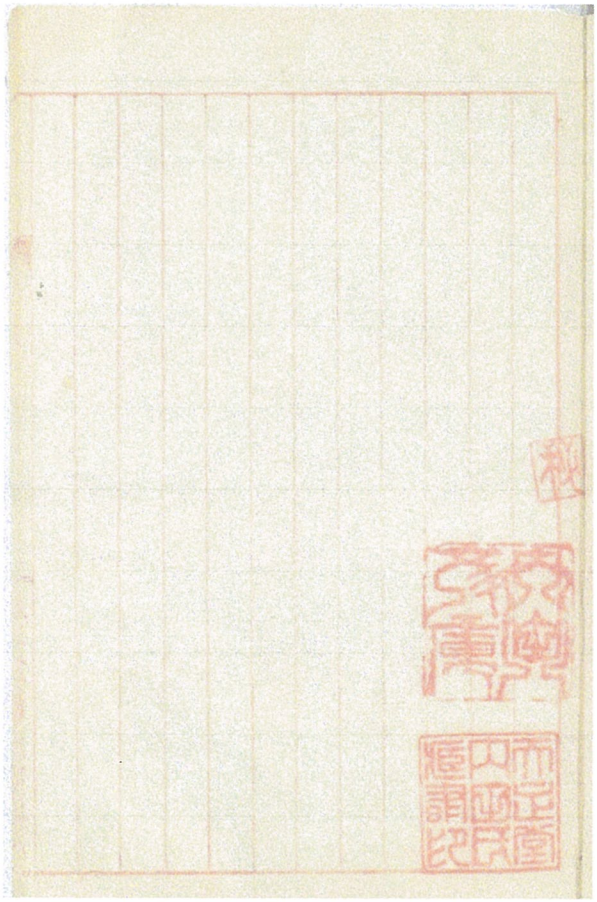
・【前出】・〈５〉の「（Ｂ－１）・芦田記」・・・「⑧・⑤・④」

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」

で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

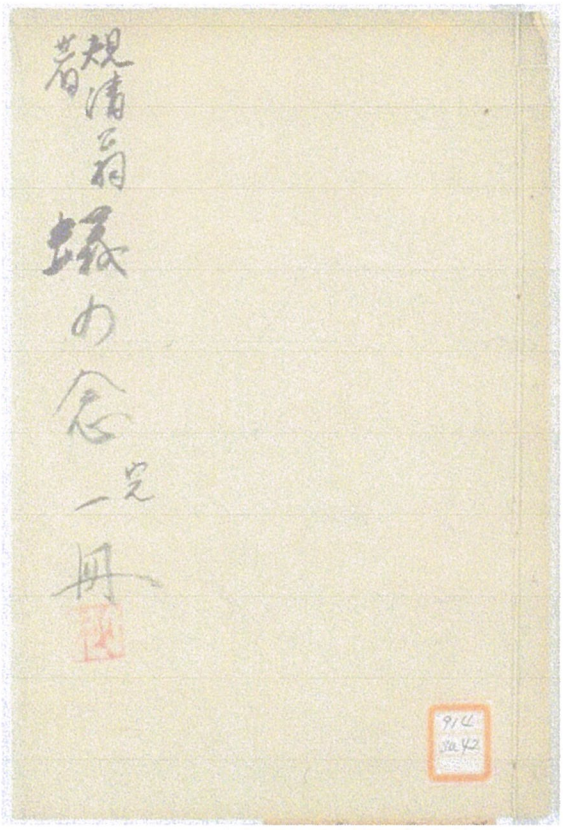
・【写真E-①】・・・「⑧・⑤・④」、および「柱刻」



・「国文学研究資料館のデータベースからの画像〔表紙の次の頁〕

・〔愛媛大学図書館「鈴鹿文庫」蔵〕

・・・



・「国文学研究資料館のデータベースからの画像」

・〔愛媛大学図書館「鈴鹿文庫」蔵〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈8〉・　九州大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書

「▼」について

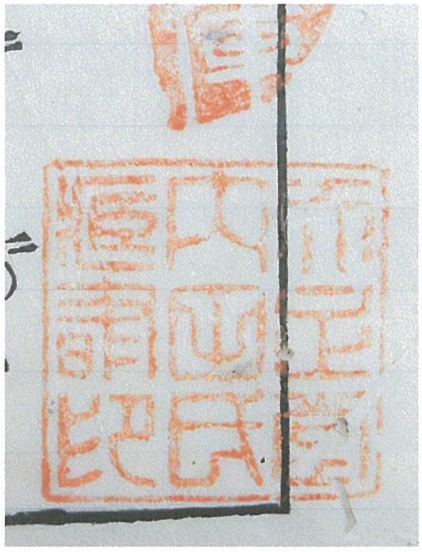
・このたび九州大学図書館から「天正堂内田氏蔵書印」のある蔵書が和田耕作により１点〔『二酉洞』（一色時棟編録）〕確認された。

・「書誌データ」による確認であるが、「蔵書印」のあるページの部分的画像のみが九州大学図書館のホームページに公開されている〔【写真F参照〕。

・▼・（８－１）・二酉洞〔一色時棟編録〕・・・「④・③」

・〔別題：「類書目録」〕

・【写真F】・・「④・③」　〔上の印が③、下の印が④〕



・〔九州大学図書館蔵『二酉洞』より〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈9〉・　国立国会図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書

「▼」について

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈9－A〉・矢内氏の確認済みのものは、以下の７点である。

・〔国立国会図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・（９Ａ－１）・本辞秘鈔〔藤原長良著〕・・・「①・②・⑤・④」

・【追加の写真】・〔追補、2021.12. 1〕

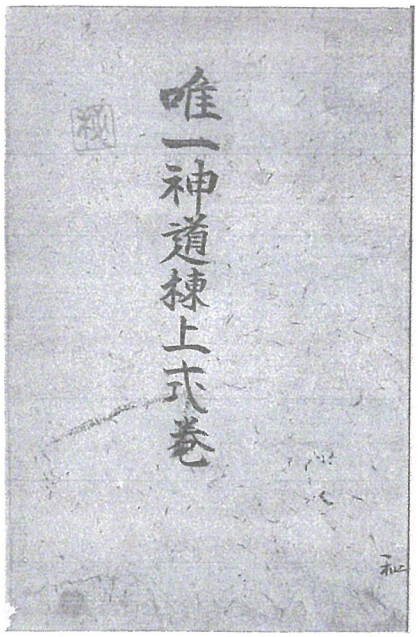
・〔国立国会図書館蔵の
『本辞秘鈔』、「目録」より〕

・▼・（９Ａ－２）・唯一神道棟上式巻〔写本〕・・・「⑧・⑤・④」

・「阿波国文庫」「不忍文庫」の印あり。

・表紙にも 「秘」の印 がある。

・【追加の写真】・〔追補、2021.12. 1〕



・〔国立国会図書館蔵の
『唯一神道棟上式巻』の「表紙」より〕

・▼・（９Ａ－３）・家相畧記・・・「①・②・⑤・④」

・▼・（９Ａ－４）・日本書紀暦考〔保井春海著〕・・・「⑧・⑤・④」

・「陰陽寮」の印あり。

・天文学で知られている渋川春海の著作である。

・▼・（９Ａ－５）・素餐録〔尾藤二洲著〕・・・「⑤・④」

・「綾部純」の印あり。

・▼・（９Ａ－６）・朝鮮交渉事件録（7巻、7冊）

〔宮内省の銘入り罫紙に筆写〕・・・「⑧・⑤・④」

・〔「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕に「宮内省」

とあるのであろう。

・▼・（９Ａ－７）・皇国之言霊〔源国雄著〕・・・「③・④」

・林国雄（1758～1819）著。

・国学を本居宣長・平田篤胤に学ぶ。

・「亀田文庫」本。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【考察４】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・まず、「（９Ａ－１）・本辞秘鈔」と「（９Ａ－３）・家相畧記」の２点に「①〔門外不出〕」と「②〔極秘〕」の印があることに注目したい。これらは、「天正堂内田氏」にとっては、稿本『自然真営道』と「同格の扱い」と思われるからである。

・このようないわば「特別扱い」は、何を意味するのであろうか。考察に値するであろう。

・「（９Ａ－１）・本辞秘鈔」は、この国会図書館の写本と東京大学にある明治期の写本の２点だけしか確認されていない。希少価値としては、極めて高い。また「偽書」との記述もみられるものである。

・次に、「（９Ａ－２）・唯一神道棟上式巻」、「（９Ａ－４）・日本書紀暦考」、「（９Ａ－６）・朝鮮交渉事件録」の３点に「⑧」〔秘〕の印があることも重要である。これにも、何かの理由があるだろう。

・「（９Ａ－２）・唯一神道棟上式巻」という書物は、この国会図書館本だけしかない。やはり希少価値がある。

・「（９Ａ－６）・朝鮮交渉事件録」については、矢内氏が「極秘資料」と思われるこの文書を、どうして「天正堂内田氏」が入手できたのか、と疑問を投げかけている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・**〈９－Ｂ〉**・和田耕作が国立国会図書館の「書誌データ」によって新たに確認したのは、以下の２点である。

・〔国立国会図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・（９Ｂ－１）・家相秘書〔写本〕・・・「⑤［③？］・④」

・▼・（９Ｂ－２）・陰陽外伝磐戸開（巻３～10）

・賀茂〔梅辻〕規清著、全天齊主人・写（明治28年春）〕

・・・「⑧・⑤［③？］・④」

・〔参考：『陰陽外伝磐戸開』は、明治24年1月、井上勝五郎により活字本が刊行されている。〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・なお、「書誌データ」による確認では、「内田文庫」とある記述が、「③」の「内田文庫」なのか、「⑤」の「内田文庫」なのかが判別できない。しかし、上記の例〔〈９－A〉の矢内氏の確認済みのもの〕の中では、「③」が少ないことを考慮して、和田の推測により「⑤」と判断した。なお、「③」の可能性も排除できないことから、［③？］と入れた〔以下、同〕。

・現物での確認ができたときには、訂正する予定である。

・【考察５】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・［テーマ＜2＞］についての考察・

・▼・「天正堂内田氏」と梅辻規清の「烏伝神道」との深い関わりについての考察　・▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・「天正堂内田氏」に関連する賀茂〔梅辻〕規清の著作は、すでに以下の２点が確認されている。

・「宮内庁書陵部蔵」・

・▼・（６－1）・瑞烏園著述集・・・「⑧・⑤・④」

・「愛媛大学図書館蔵」・

・▼・（７－1）・蟻の念〔梅辻〔賀茂〕規清著〕

・・・「⑧・⑤・④」

・「柱刻」〔原稿用紙の左右中央部分の文字〕には、「朱文字」で「天正堂讀我書屋蔵」とある。

・『蟻の念』については、前述を参照のこと。

・上記のとおり、３点目〔国立国会図書館蔵〕の規清の著作が見つかった。

・▼・（９B－２）・陰陽外伝磐戸開（巻３～10）

・賀茂〔梅辻〕規清著、全天齊主人・写（明治28年春）〕

・・・「⑧・⑤［③？］・④」

・〔参考：『陰陽外伝磐戸開』は、明治24年1月、
井上勝五郎により活字本が刊行されている。〕

・「天正堂内田氏」という人物は、賀茂〔梅辻〕規清の「烏伝（うでん）神道」と深い関わりがありそうである。

・上記の３点に、「⑧」〔「秘」〕の印があるのはなぜか。その理由は、「梅辻規清」の生涯と「烏伝神道」の歴史の中にあった。

・東京都の「文化財情報データベース」では、八丈島にある「梅辻規清墓」について、次のように解説している。

・「解説：賀茂〔梅辻〕規清は、江戸時代末期の神道思想家で烏伝（うでん）神道の開祖です。寛政10（1798）年、山城上賀茂神社の社家に生まれました。神学、国学、天文、暦数に精通し、陽明学、禅学などの知識も豊富にもっていました。また好んで諸国を遍歴しました。この遍歴における宗教体験と神道信仰、さらに陽明学、禅学の思想を採り入れて確立したのが烏伝神道です。
弘化3（1846）年、江戸下谷池の端仲町に居を構え、ここを瑞烏園と名づけて神道教法の本社として広く庶民を教化しました。門弟信者数は数千人に及んだといいます。幕府はその活発な布教活動を恐れて規清を投獄、弘化4（1847）年、八丈島に配流しました。
規清は、中之郷の山下鎗十郎宅に寓して100冊もの教書を著したといわれ、島民の子弟の教育にも尽力しました。文久元（12861）年7月21日、64歳で没しました。
著書に、『日本書紀常世長鳴鳥（とこよのながなきどり）』、『烏伝神道大意』、『陰陽外伝磐戸開』、『根国史内篇』、『古事記鰐廼鈴形（わにのすずがた）』などがあります。・・」〔「東京都文化財情報データベース」より〕

・このように、「烏伝神道」は幕府からは弾圧されていた経緯があり、明治時代になっても、おそらく大っぴらにできるような状況にはなかったものと思われる。したがって、「天正堂内田氏」が、これらの書物を「秘物」扱いとする理由は、十二分にあったのである。

・菅田正昭の『古神道とエコロジー』によると、梅辻規清が得意とする領域は、「神道・国学・霊学・易学・天文学・数学・都市工学・建築学・経済学・農学・博物学・医学・薬学・教育学・・・等々と、その守備範囲はじつに広い。」〔菅田正昭『古神道とエコロジー――梅辻規清とその霊的系譜』、1997、たちばな出版、p35〕という。

・このような「烏伝神道」の知的背景を認識して、あらためて「天正堂内田氏」の旧蔵書群を見てみると、上記の３点以外にもそれらの領域に関連する文献と思われる多くの書物があるようである。

・以下に、それらをまとめて示してみよう。

・・・

梅辻規清の「烏伝神道」に関連した領域の書物である可能性を考えると、「天正堂内田氏」は、「烏伝神道」に関係のある人物であると推察することができるであろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈10〉・　東京大学大学院人文科学研究科・文学部図書室〔旧神道究室旧蔵書〕の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」について

・このたび東京大学大学院人文科学研究科・文学部図書室〔旧神道研究室旧蔵書〕から「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書１点が和田耕作により確認された〔書誌データによる。〕。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・（10－１）・日本書紀神道索隠（存１巻）

・・・「⑧・⑤［③？］・④」

・〔写本、存巻：乾〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈11〉・　早稲田大学図書館の「天正堂蔵書」印がある蔵書「■」について

・このたび、新たに早稲田大学図書館で「天正堂蔵書」印のある書物が２点見つかった。この「天正堂蔵書」印は、矢内氏の論考にはないもので、ここに和田耕作が初めて紹介するものである。

・しかし、「天正堂蔵書」印と「天正堂内田氏蔵書印」との関係については不明であるが、「天正堂内田氏」と「天正堂」とは、同一の人物である可能性もある〔下記、参照〕。

・「村石文庫」の印と「天正堂蔵書」の印が対になっているように見える。

・［印番号］・⑨・　「村石文庫」・「天正堂蔵書」

・■・（11－1）・熊耳先生文集．正編・・・「⑨」

・詩文家・大内熊耳の文集である。

・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・松平康国旧蔵（「松平蔵書」の印あり）

・松平康国は、漢学者。早稲田大学名誉教授。無窮会東洋文化研究所教頭。1863～1945。

・松平康国は、内田銀蔵と早稲田大学での同僚であった。

・■・（11－2）・船長日記．上、中、下之巻〔池田寛親著〕・・・「⑨」

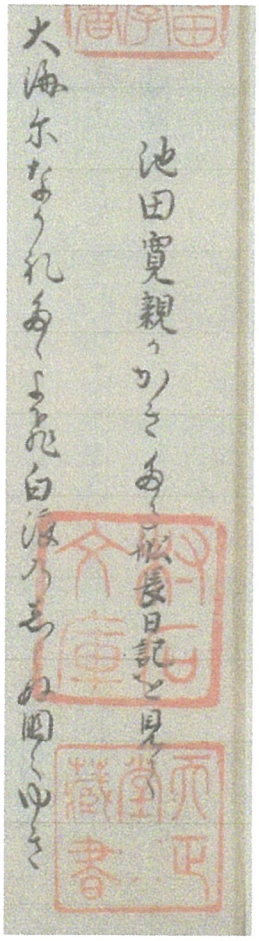
・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・序文＝本居大平。池田寛親は本居派の国学者。

・内容は、船頭・小栗重吉の漂流記。

・池田寛親の聞き取りによる口述筆記によりなる。

・【写真G】・・・・「⑨」



〔早稲田大学図書館蔵『船長日記』より〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【考察６】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・早稲田大学名誉教授「松平康国」の名前のルーツは、「芦田氏」
〔「依田氏」〕の戦国武将「松平康国」である。　・▼・

・早稲田大学名誉教授「松平康国」と、戦国時代の武将「松平康国」とは、どのような関係があるのだろうか。

・早稲田大学教授「松平康国」は、幕府の旗本・大久保忠恕の子として生まれている。

・徳川家の忠臣・大久保忠世〔先祖は、松平氏の出である。〕と芦田信蕃〔武将「松平康国」の父〕は昵懇の間柄であり、忠世の子・忠隣の娘が、信蕃の長男「武将・松平康国」に嫁いでいる。

・早稲田大学教授「松平康国」の父である旗本・大久保忠恕は、まちがいなく徳川家の忠臣・大久保忠世につらなる一族であろう。

・早稲田大学教授「松平康国」が、戦国時代の武将「松平康国」と同姓同名であることには、大きな理由があったのである。すなわち、教授「松平康国」の名前のルーツは、「芦田氏」〔「依田氏」〕の武将「松平康国」なのであった。

・《参考文献》・

・a）市村到著『戦国三代の記――真田昌幸と伍した芦田（依田）信蕃とその一族』（2016年9月、悠光堂刊）
・巻末に『盧田記（依田記）』（原文）を収録。
・b）市村到著『戦国三代と天下人――芦田（依田）氏の軌跡から』（2020年7月、悠光堂刊）

・以下に、「天正堂内田氏」と「天正堂」関連の書物の中にある早稲田大学教授「松平康国旧蔵書」をまとめておこう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【早稲田大学図書館の「天正堂内田氏蔵書印」がある蔵書「▼」】

・▼・（A－４）・周南先生文集　六冊　・・・「⑤・④」

・山県周南（1687～1752）著。名は「孝孺」、字は「次公」、号は「周南」。萩藩校「明倫館」学頭。荻生徂徠に師事。

・〔「松平蔵書」の丸印あり。「松平康国旧蔵書」〕

・「松平康国」については、【考察１】も参照のこと。

・▼・（A－７）・石梁文集・・・「⑤・④」

・樺島石梁（1754～1827）。名は「公礼」、字は「世儀」、

号は「石梁・万年」。久留米藩校「明善堂」教授。

・〔「松平蔵書」の丸印あり。「松平康国旧蔵書」〕

・「松平康国」については、【考察１】も参照のこと。

・【早稲田大学図書館の「天正堂蔵書」印がある蔵書「■」】

・■・（11－１）・熊耳先生文集．正編・・・「⑨」

・詩文家・大内熊耳の文集である。

・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・松平康国旧蔵（「松平蔵書」の印あり）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・これらは、教授・松平康国の専門領域の書物ばかりであるが、

「天正堂内田氏」と「天正堂」の蔵書の内容から考察すると、

「天正堂内田氏」と「天正堂」とは、同一の人物と考えられない

こともない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈12〉・　明治大学図書館「蘆田文庫」の「天正堂蔵書」の印がある蔵書〔■〕について

・このたび、新たに明治大学図書館「蘆田文庫」から「天正堂蔵書」印のある書物が４点見つかった。この「天正堂蔵書」印は、矢内氏の論考にはないもので、ここに和田耕作が初めて紹介するものである。

・「蘆田文庫」印と「蘆田伊人図書記」印が対になって押されているように、「村石文庫」印と「天正堂蔵書」印も対になって押されているように見える。

・この「蘆田氏」＝「蘆田伊人」の例にならえば、「村石氏」＝「天正堂」という可能性も十分にありえる。

・考えてみれば、「内田文庫」印と「天正堂内田氏蔵書印」印も、
それらのほとんどが、対になって押されている。それが当時、蔵書
印を押す際の慣習であったようである。

・［印番号］・⑨・「村石文庫」・「天正堂蔵書」

・■・（12－１）・安房国全図〔鶴峰彦一郎著、嘉永二年版〕・・・「⑨」
・「蘆田文庫」「蘆田伊人図書記」「土肥家蔵」「村石文庫」
「天正堂蔵書」の印あり。
・■・（12－２）・摂津国名所大絵図〔青竹堂光清著、寛延元年版〕
・・・「⑨」
・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・■・（12－３）・播磨国細見図；播磨大絵図（山下重政作、
寛延二年版）・・・「⑨」
・「蘆田文庫」「蘆田伊人図書記」「村石文庫」「天正堂蔵書」
の印あり。

・■・（12－４）・備中国巡覧大絵図；備中国大絵図・・・「⑨」
・嘉永7年版。
・「村石文庫」「天正堂蔵書」の印あり。

・【写真H】・・・「⑨」

「村石文庫」

「天正堂蔵書」

・〔蘆田文庫編纂委員会編『蘆田文庫目録　古地図編』より〕

・《参考文献》・

・蘆田文庫編纂委員会編『蘆田文庫目録　古地図編』

（2004年3月、明治大学人文科学研究所発行）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・**【考察７】**・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・▼・歴史地理学者の「蘆田伊人」と『芦田記』の「芦田氏」一族との関係について　　・▼・

・まず、歴史地理学者の「蘆田伊人」（1877～1960）の略歴の一部を見てみよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・明治10年（1877）9月、福井市日出町新屋敷にて、蘆田碩、岩子の長男として生まれる。

祖父・十左衛門は、福井藩勘定奉行。

父・碩は、福井藩藩学・明新館教授。福井県第三師範学校漢学教授。

・明治31年（1898）、皇典研究所・国学院入学、国史・国文・法制を専攻。

・明治33年（1900）、国学院を中退し、早稲田大学史学及び英文科に入学。吉田東伍に学び『日本読史地図』の編纂に参加。

・明治37年（1904）、早稲田大学卒業。弘前市・青森県中学校

教諭。

・明治38年（1905）、陸軍歩兵第三連隊に入隊。

・明治39年（1906）、東京帝国大学史料編纂掛（編纂官補）で「南北朝時代史」編纂部勤務。

・明治42年（1909）、日本歴史地理研究会に入会。

・明治44年（1911）、史料編纂官補を辞し、華族や国家機関の嘱託により調査研究を行う。

・明治44年～大正7年、三井男爵家・編纂室嘱託。三井家遠祖の史料調査。

・大正6年～昭和2年、旧福井藩越前松平家（子爵）嘱託。松平春嶽公記念文庫の設立、伝記の編纂に従事する。

・大正7年～大正10年、帝国学士院の研究助成を受け大名領地の沿革調査。

・昭和2年～昭和15年、旧小浜藩酒井伯爵家編纂部主任。酒井家史料稿本800余冊を作成する。

・昭和10年、帝国学士院の研究助成を受け、日本村落の歴史地理的研究。『大日本読史地図』（冨山房刊）。

・昭和11年～昭和12年、宮内省帝室林野局の委嘱により帝室御料地の沿革調査。『御料地史稿』（帝室林野局）。

・『松平春嶽全集』（３巻、昭和14年～昭和17年）の編纂。

・昭和35年（1960）6月、諏訪市にて死去。福井市妙長寺に埋葬された。

・《参考文献》・

・蘆田文庫編纂委員会編『蘆田文庫目録　古地図編』（2004年3月、明治大学人文科学研究所発行）など。

・・・

深いことである。

・教授の「松平康国」と学者の「蘆田伊人」のもとに、「天正堂内田氏蔵書」印や「天正堂蔵書」印のある書物が、このように多く見られるのは、果たして偶然なのであろうか。

・・・

・《参考文献》・

・蘆田文庫編纂委員会編『蘆田文庫目録　古地図編』

（2004年3月、明治大学人文科学研究所発行）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈14〉・　早稲田大学図書館で「内田氏蔵本」印・「内田慎吾之印」がある蔵書〔▽〕について

・早稲田大学図書館から「内田氏蔵本」印・「内田慎吾之印」のある書物が１点見つかった。これが、「天正堂内田氏蔵書印」などと関係があるかどうかについては不明であるが、参考までに示すことにした。

・▽・（14－1）・怪異弁断．巻之第１～４（西川如見著）・・・「⑪」

・［印番号］・・・・・「⑪」

・【写真J】・・・・「⑪」

・〔早稲田大学図書館蔵『怪異弁断』より〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈15〉・　明治・大正・昭和期の「天正堂」という出版社などについて

・以下は、国立国会図書館の蔵書の書誌情報、およびネット上の古書情報などによる調査である。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈15－A〉・　明治期の「天正堂」〔土谷鋼太郎〕と大正・昭和期の「天正堂画局」〔土谷傳〕について

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・（15A－1）・『全国鉄道汽車便覧』

・国立国会図書館の蔵本による。

・明治27年11月刊行

・編纂印刷兼発行者＝天正堂　土谷鋼太郎

・東京市下谷区車阪町七拾七番地

・「石版　銅版　活版　木版　彫刻印刷応貴嘱」

・（15A－2）・『日本全国鉄道線路図　附東京市町名一覧及里程賃金表』

・古書情報による。

・明治30年刊行

・著者＝天正堂　土谷鋼太郎

・（15A－3）・『全国鉄道汽車便覧』

・古書情報による。

・明治34年刊行

・著者＝天正堂　土谷鋼太郎

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・（15A－4）・『桃山参拝記念画帖　附乃木将軍一代記』

・古書情報による。

・著者＝土谷傳

・大正9年刊行

・発行所＝天正堂画局

・（15A－5）・『東京名所　新吉原花魁道中之光景　石版画』

・古書情報による。

・著者・発行者＝土谷傳

・大正12年発行

・発行所＝天正堂画局

・（15A－６）・『東京駅及丸之内ビルデイング之偉観　石版画』

・古書情報による。

・著者・発行者＝土谷傳

・昭和11年発行

・発行所＝天正堂画局

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈15－B〉・　明治・大正期の出版社「天正堂」「天正堂書店」

〔嵯峨野平左衛門〕と昭和期の出版社「天正堂」

〔鹽谷晴如〕、その他について

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・（15B－1）・『日露戦局地図』

・古書情報による。

・東亜地理協会〔図〕

・明治37年刊

・発行＝天正堂　「嵯峨野平左衛門」

・（15B－2）・『最新実測東京全図　新市区改正道路電車鉄道案内図』

・国立国会図書館の蔵本による。

・明治43年1月刊行

・著者＝「嵯峨野平左衛門編」

・発行＝天正堂　嵯峨野平左衛門

・（15B－3）・帝国史談研究会編『絵入近世歴史』（東京・天正堂刊）

・国立国会図書館の蔵本による。

・明治43年4月刊行

・著作者「瀧澤善太郎」

・東京市下谷区花園町六番地

・発行兼印刷者　「嵯峨野平左衛門」

・東京市下谷区御徒士町一丁目五十四番地

・発売所「天正堂書店」

・（15B－4）・帝国史談会編『国民必携絵入近世歴史』

・大正7年、天正堂書店刊

・古書情報による。

・（15B－5）・帝国史談会編『天下変遷七十余年近世歴史』

（発行所＝東京・天正堂書店、大正13年5月刊行）

・国立国会図書館の蔵本による。

・本文の末尾に「講演者・瀧澤善太郎」とある。

・本書は、（15B－3）の改訂版である。

・著作者兼発行印刷者　「嵯峨濃〔野〕平左衛門」

・東京市下谷区竹町十四番地

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・（15B－6）・『支那小説史』（著者＝魯迅、訳者＝増田渉）

・国立国会図書館の蔵本による。

・天正堂刊（東京市牛込区船河原町四番地）

・昭和13年6月発行

・発行者＝鹽谷晴如（東京市神田区一ツ橋二丁目九番地）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〔本書の初版本は、三上於菟吉のサイレン社から昭和10年に刊行されていることが判明した。したがって、本書はその再刊本である。〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【追補】・・・〔2021年12月1日〕・・・・・・・・・・

・（15B－7）・『挿花千草集』（乾・坤、二冊）

・国立国会図書館蔵本による。

・明治36年11月発行

・編輯・発行・兼印刷人：内藤芳之介

・発行所：天正堂（水戸市上市南町二十二番地）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【考察８】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・「天正堂」（土谷鋼太郎）〔明治期〕が、二代目「土谷傳」から「天正堂画局」〔大正・昭和期〕となっていることがわかる。

・「天正堂」（土谷鋼太郎）が、後に出版社の「天正堂」〔「天正堂書店」〕（嵯峨野平左衛門）と版画を製作・発行する「天正堂画局」（土谷傳）に分かれた可能性が極めて高い。

・これらの「天正堂」「天正堂画局」「天正堂書店」と「天正堂内田氏」との関係については不明である。

・明治期の出版社「天正堂」（土谷鋼太郎）、明治・大正期の出版社「天正堂」〔「天正堂書店」〕（嵯峨野平左衛門）と昭和期の出版社「天正堂」（鹽谷晴如）との関連も不明である。

・このように、特に明治・大正期に「天正堂」という出版社（版画を含む）は、一般的にもかなり知られていたものと考えられる。
それなのになぜ「内田氏」は「天正堂内田氏」を名乗ったのであろうか。もしかしたら「内田氏」は、これらの「天正堂」と関連のある人物であったのかもしれない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈16〉・　むすび

・以上、「天正堂内田氏」に関連する、または関連すると思われる書物や人物について考察してみた〔上記の各【考察】を参照〕。

・そして、「天正堂内田氏」は、「芦田氏」〔「依田氏」〕の一族と密接な関係がある人であること。

・「天正堂内田氏」は、梅辻規清の「烏伝神道」に深い関わりがある

人であるということ、などを推論した。

・しかし、「天正堂内田氏」については、なお「謎」の部分が多く、さらに その「謎」は深まるばかりである。

・「はじめに」でも述べたように、本稿のきっかけは矢内信吾氏の論考である。本稿とともに矢内論文を熟読参照していただきたい。

・本稿が、今後の「天正堂内田氏」の探究のための一助ともなれば幸いである。

・・・